フォトエッセイ

写真・文
アンドレア・ロペス

写真1　集まって打ち合わせを行うボランティア・ガイドの人たち

社会参加―皇居と静岡での高齢者ボランティアの経験から

老い。生まれた時から生物体はすでにこのプロセスを開始する。人間の老いを扱う老年学（gerontology）では、老いを生物学的・精神的・社会文化的過程だと定義づけている。科学はもとより哲学、宗教など、他の分野も人生の最終ステージを「老年」と呼びならわしてきた。「老い」とひとくちで言ってもひとそれぞれが属する社会とどのように関わっているかでその人の生き方はいかようにでも変わる。社会関係が人の生き方にも凝縮されて見えてくるのである。

私は、二〇一〇年八月にブラジルから来日し、六カ月間日本に滞在した。専門は人類学であり、日本での研究テーマは高齢者、特に職を退いた人々が社会とどのような関わりを持っているかを調べることにあった。資料の収集はもとよりできるだけ多くのところを訪れ日本の高齢者のかたに会い、記録にとどめた。実際、彼らは働き、ひとと会い、買い物をし、販売したり、本を読み上げたり、飲んだり歌ったり、自転車で動き回り、遠くへ出かけ、家族との時間を楽しんだり、宗教的な活動をしたり…実にいろいろな活動を行っているのだ。

■■

ここで紹介するのはそれらのうちの二つのボランティア・グループである。どちらも六〇歳以上の方々が大半を占めており無報酬で地域コミュニティーのために働いている。

最初に訪問した団体は三年前に活動を開始した。主たる活動は一般の人々を皇居の庭園内を案内することである。この事業を運営する母体組織は「菊友文化協会」という財団法人である。

写真3　昔の風景と現在とを比べてみる

写真2　いつも笑顔で。ボランティア説明員のかた

写真6　話を伺ったボランティアグループのかたがた。後列、左から2人目が筆者

写真5　ボランティアグループの人たち

写真4　自転車に乗って各グループの進行をチェック

かれらの皇居内案内活動を紹介しよう。私は一周二時間の見学コースのひとつに参加した。参加者は、先ず初めにボランティア・グループの方々からのオリエンテーションを受ける（写真1）。とても熱が入っている。ガイドの人はとても親切で参加者に庭園に生える植物について多くの知識を披露していた。彼は絶えず大きな笑みを絶やすことなく質問にひとつひとつ根気よく答えていた（写真2）。東京という巨大都市の中心にこのように多くの種類の動物や植物が生息している特別の保護区があり、それが人々に自然の大切さを教えてくれている。また、このツアーに参加すると皇居の歴史が日本国家の歴史につながっていることをつぶさに実感することができる。案内の道すがらガイドのかたは昔の皇居のたたずまいはどうだったのか、それがどのように変遷していったかについて写真を使って説明する（写真3）。

ボランティアをする上での必要知識は専用のトレーニング教材と教習によって習得する。それを済ませて実際の活動に入るのである。知識を深めたり広げたりするための指導も行われる。特筆すべきはボランティアの方々はみな全体の進行状況を乱さないように行動しているということだ。私の参加したグループと同時並行で他のボランティアが別のグループを率いて別のコースの案内を行っている。各グループがばらばらにならないように調整するのもボランティアの仕事だ。また、あるボランティアは自転車にまたがって各グループと連絡を取り合い、順調に進んでいるかを確認している（写真4）。

一周ぐるっと回り終えると各グループが入り口に再度集まり参加者からの質問を受け付ける。そして全員で記念撮影となる（写真5）。

写真8　東京の自然について議論する

写真7　議論は続く

写真9　静岡点字図書館ボランティアコーディネーターのかたがた。右から二人目が筆者。右端は研究所でのカウンターパートの近田亮平研究員

私は、そのあとでボランティアの方々と彼らの活動や経験についてお話を伺う機会を得た。地下鉄の駅に向かう途中もまだボランティアの仕事のことを話し続けた（写真7）。かれらは一本の木を巡り東京の自然やら樹木の分析やら、蘊蓄を披露しあっていた（写真8）。

■

二番目に紹介するのは静岡県点字図書館が実施する県の事業で活動しているボランティア・グループである。一九七〇年に設立された。（写真9）。

ボランティア活動の中心は視覚障害をもつ利用者のために本を朗読、録音し、また点字に直す作業である（写真10）。ボランティアは、ほとんどが女性で非常な正確さが要求される作業に従事している。長時間、集中力をもって働かなければならないし、点字やコンピューターの知識も必要だ（写真11）。加えてボランティアの人たちはその他の作業、例えば初心者の支援、トレーニング講習での講義やアシスタント、そして仕上がりの点検、修正作業なども行う。人によっては目の不自由なひとをつれて日帰りの旅行にでかけたりおしゃべりの相手になってあげたりする。私は何人かのボランティアの方とお会いし、これまでの体験を伺うことができた（写真12）。

この事業では非常に厳格な採用と訓練プログラムを実施している。職員採用応募者は試験を受け、合格した後も仕事を始めるまで一年間の訓練を受けることになっている。第一学期は理論を中心に、第二学期は実務中心となる。彼らの仕事の努力の甲斐あり大変充実したボイス・ブックと点字本からなる専門図書館が実現した（写真14）。現在書籍はCD

写真11　点字の点検、修正作業

写真13　点字図書の蔵書

写真10　ボランティアのかたがた

写真14　音声図書の蔵書

に保存され（写真15）、各地から視覚障害の方々がこの特筆すべきそして他に例のない公のサービスを利用している。すべてボランティアの人々によって支えられているのである。

■

■

二つのグループには共通して言えるのは社会への帰属意識と互助の精神があるということだ。自分たちの組織が人生の非常に大切な一部分になっているとの認識がある。ボランティアの人たちは退職後、第二の人生を開始したという。静岡のボランティアの方々は直接、顧客に向き合っているわけではないがグループ員同士の連帯から得られる喜びが今後も活動を続けていこうという活力の源となっている。自分たちが働いて提供しているサービスが目の不自由な人々の生活の役に立ち、また自分たちの生活の刺激になっていると感じている。

サービスを作り出す高齢者もその利用者も互いに面識があるわけではないが目に見えないネットワークが形成され社会的相互依存の関係を作り出している。それは意味のある、尊ぶべきものとして機能しているのである。

日本のように高齢化が進んでいる社会では高齢になってもボランティアの仕事を通じて社会に関わり、大切な役割を果たすことできる。同時に自立的で自治的な活動に身を置き皆が快適で有意義な暮らしを送ることができる。勤めや家庭の義務から退いたあとも社会的関係を持つことで自らの生き方に責任を負い続ける。なぜなら老いつつも人々の存在の意義を作り出していくという根本的なプロセスに関わり続けることになるからである。

謝　辞

調査、執筆するに当たり、ご支援をいただいた近田文弘氏、近田洋子氏、堂本邦子氏、近田亮平氏そしてジュリアカルデロン・カワサキ氏に深く感謝する。また自らの活動をご紹介ただいたボランティアの皆様そして、本稿出版の機会を与えていただいた恒石さん、真田さんにお礼を申しあげたい。

写真15　CDとして整備された音声図書

写真12　インタビューに応じていただいたボランティアのかたがた

Andrea Lopes, Ph.D.／
ブラジル　サンパウロ大学　准教授

専門は人類学、老年学。
2010年8月から2011年1月までアジ研の海外客員研究員として日本に滞在。
そのときの研究テーマは「ボランティアの仕事と高齢化：
アメリカ、ブラジルそして日本のシニア世代の比較研究」。